



 Data	2025-126
監督・脚本: カルメン・チャップリン	
出演: マイケル・チャップリン/ジェラルディン・チャップリン/ジョニー・デップ/トニー・ガトリフ/エミール・クストリツァ/ストーケロ・ローゼンバーク/リタ・カベルト/ファルキート	

👁️👁️ みどころ

20世紀最大の映画スター！それがチャールズ・チャップリンであることに異論を唱える人はいないはず！しかして、彼のルーツに迫ると・・・。

本作のテーマは、「私の血にはロマの血が流れている」だが、それは息子がプロデュースし、孫娘が監督した、チャップリン家唯一の“家族公認のドキュメンタリー映画”たる本作なればこそ！そこまでの本音がズバリ・ズバリと！

チャップリンと聞けば誰でも、チョビひげ、山高帽にステッキの姿を思い浮かべるが、さあ、家族が語る素顔のチャップリンとは？1950年代、アメリカに“赤狩り”の嵐が吹き荒れる中、チャップリンも事実上アメリカから追放されてしまったが、それは一体なぜ？そんなチャップリンの実像と彼が人類に残した偉大な遺産を本作からしっかり確認したい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■20世紀最大の映画スター！それがこの男！■□■

日本における昭和最大の映画スターは三船敏郎、昭和最大の歌手は美空ひばりだが、世界における20世紀最大の映画スターは、チャールズ・チャップリン！チョビひげを生やし、ダブダブのズボンと大きなドタ靴、ステッキに山高帽のスタイルは若き日のチャップリンのおなじみの姿だが、高齢になってくると・・・？

キネマ旬報映画総合研究所編『映画検定 公式テキストブック』（06年）によれば、リュミエール兄弟による「シネマトグラフ」の誕生は1895年、そしてそれまでの「無声映画」に対する「トーキー」の誕生は1923年だ。したがって、チャップリンの初期長編作品『キッド』（21年）は当然無声映画だ。チャップリンは後期の作品も素晴らしいが、初期の無声映画の数々はとりわけ素晴らしいものが多いので、それらは必見！しかして、チャップリンは『キッド』から最後の主演作『ニューヨークの王様』（57年）まで約50年間も俳優、

監督として活躍し、1977年に永眠したのだから、彼こそまさに20世紀最大の映画スターだ。

そんなチャップリンのルーツに迫る「チャップリン家初の公認ドキュメンタリー」が本作だ。本作は息子のマイケル・チャップリンがプロデュースし、孫娘のカルメン・チャップリンが監督したものだから、本作は“家族が語るチャップリン”の姿でいっぱい！『独裁者』(40年)や『ライムライト』(52年)等、代表作の名シーンの数々も登場するから、こりゃ必見！

■□■8人の子供たちとその孫たちはどんな活躍を？■□■

チャップリンは4度結婚し、4人目の妻ウーナとの間に8人の子供を設けている。第1子のジェラルディン・チャップリンは俳優、第2子のマイケル・チャップリンは作家、第4子のヴィクトリア・チャップリンはパフォーマー、第6子のジェーン・チャップリンは作家、第8子で末っ子のクリストファー・チャップリンは音楽家として活躍。さらに、マイケルの子供カルメン(チャップリンの孫娘)は監督だから、まさにチャップリン一家は芸術家ぞろいだ。

上記のうち、ジェラルディン・チャップリンについて私は『ドクトル・ジバゴ』(65年)、『シネマ38』未掲載)でよく覚えているが、ジェラルディンの娘、ウーナも女優で、『アバター ファイヤー・アンド・アッシュ』(25年)のヴァラン役を演じているからすごい。他方、本作をプロデュースし、父チャップリンの姿を追いかけているのは、第2子(長男)のマイケル、そして本作の監督を務めたのはジェラルディンの娘のカルメンだから、まさに本作はチャップリン一家総出で完成させたドキュメンタリー映画だ。

本作は、「私にはロマの血が流れている。」とのチャップリンの語りから始まるが、それは一体なぜ？まずはそこからじっくりと・・・。

■□■“赤狩り”旋風の中、チャップリンもアメリカから追放！■□■

第1次世界大戦にも第2次世界大戦にも勝利したアメリカは、民主主義の国！戦後の日本はその影響の下、天皇を象徴とし、戦争を放棄する日本国憲法によって、それまでの軍国主義から一転して民主化を徹底させた。ところが、民主主義の本家たるアメリカでは1950年代、政府や行政機関に共産主義者とその同調者がいるとしてそれらの人物を炙り出すため、議会が非米活動委員会を設置し、マッカーシー議員を中心に聴聞会を開催。それを受けて、ハリウッドでも共産主義者を摘発するべく聴聞会が開催された。

この“赤狩り”によって共産党員とその同調者とされた映画人がブラックリストに載せられ、仕事ができなくなった。その犠牲者の1人が『トランボ ハリウッドに最も嫌われた男』(15年)、『シネマ38』123頁)で描かれたダルトン・トランボだ。ちなみに、「ハリウッド・テン」とは、1947年10月にワシントンDCで行われた非米活動委員会の聴聞会で、言論の自由、表現の自由を理由に証言を拒否し、議会侮辱罪に問われ投獄された映画



人 10 名のことだが、ダルトン・トランボもその中の 1 人だ。そんな時代状況下の 1952 年、イギリスに向かう途中のチャップリンは再入国許可証が取り消され、事実上アメリカを追放されてしまったが、それは一体なぜ？

『殺人狂時代』（47 年）がアメリカ各地で上映禁止とされた上、チャップリンがアメリカから追放されたことは、チャップリンに関する重要な情報として今ではよく知られているが、それはチャップリンに対して“共産主義者”という謂われのない疑いをかけられ、レッテル貼りされたため。そして、チャップリンが“共産主義者”に仕立て上げられたのは、彼が長年演じ続けた前記のキャラのため、そして彼自身が「私にはロマの血が流れている」と語っていたためだ。本作を見ていると、チャップリンは「ロマの

血を 8 分の 1 引き、そのことを誇りに思っていた」ことがわかってくるが、そのことはマイケルが父チャップリンのルーツを探るべく、さまざまなリサーチを行ったことによって明らかになったようだ。しかし、「ロマの血」って一体ナニ？

■□■「私にはロマの血が流れている」がテーマに！■□■

日本ではロマ＝ジプシーと考えられているが、ユダヤ（人）と同じように、ロマのルーツは古くかつ複雑だ。しかし、迫害を受け続けながらも誇りを持ち続けたロマたちは世界各地で生き続けている。とりわけ有名なのは彼らの音楽性の高さと、哀愁に満ちたロマ音楽の素晴らしさは私もよく知っている。ちなみに、ロマ音楽の影響を強く受けたクラシック作曲家の一人がブラームス。チャップリンが『黄金狂時代』で使用したことで超有名になったブラームスの『ハンガリー一部曲第 5 番』のリズミカルかつダイナミックな響きは感動的だ。

他方、ロマと聞けば、私はアーネスト・ヘミングウェイの小説『誰がために鐘は鳴る』（40 年）を映画化した同名作品（43 年）を中学生の時に観て感動したことをよく覚えている。同作は「スペイン内戦」にアメリカから義勇軍として参加したゲイリー・クーバー演じるロベルトが、人民戦線派のゲリラと協力して橋の爆破に挑む社会問題提起作だったが、そこで興味深いのはイングリッド・バーグマン演じる市長の娘マリアとロベルトが恋に落ち

ること。そこでのマリアの名セリフが「キスの仕方を知らないの。鼻と鼻が邪魔するわ。」だが、本作の関連で興味深いのは、かつて人民戦線派の戦士だった夫が戦いに興味を失い墮落していく中、妻のピラーが墮落しきった夫に代わってまとめていくゲリラ部隊がジブシー集団だったということだ。内向き思考の強い日本人には、ユダヤやロマ、さらには華僑が世界を股にかけて放浪している姿は理解しづらいが、チャップリンの放浪の人生を見ていると、まさに「私の血にはロマの血が流れている」との彼の言葉に納得！

■□■あの名シーン、あの名曲に思わず涙！■□■

私がチャップリン映画の魅力を初めて知ったのは、大学生の時に何かの企画で「チャップリン映画特集」を観た時。無声映画については、日本の“目玉の松ちゃん”こと尾上松之助について知っていたが、風刺に富んだ、こんなに面白い無声映画があることに驚かされた。そこで観たのは『黄金狂時代』（1925年）や『街の灯』（31年）、『モダン・タイムス』（36年）等だが、その後には『独裁者』（40年）や『殺人狂時代』（47年）、『ライムライト』（52年）では、あの名シーン・あの名曲に涙したものだ。そして、何よりもあつと驚かされた映画が、『独裁者』だ。ナチスヒトラーの全盛時代の1940年に、よくぞ堂々とこんな“ヒトラー批判映画”を企画し、製作し、公開したものだ。とチャップリンの映画（人）魂に拍手！本作には、あの名作のあの名シーン、あの名作のあの名曲が少しずつ紹介されるので、それを思い出させてくれるだけでも本作はすごい。

■□■日本の映画人もこんな巨人を見習わなくちゃ！■□■

12月30日、31日になると、テレビは1年間を振り返るさまざまな年末年始の特集番組を組むから、2025年も政治、経済、社会、文化、スポーツ等の各方面にわたってそれぞれの十大ニュースを上げることができる。他方、1年ごとではなく、時代の流れ＝潮流という観点で考えると、世界の政治では、米国の衰退と中国の強大化、かつての東西冷戦に代わる新たな、西欧型民主主義国 VS 一党独裁型中央集権国家の対立の激化、そして日本の政治では自民党の退潮と高市新内閣での巻き返しの期待といったところが興味深い。

また2002年から『SHOW - HEY シネマルーム』を出版し、現在58巻まで出版している弁護士兼映画評論家の私としては、近時の日本映画界の衰退（出来の悪さ）とTVを含めたマスコミの商業主義化、もっと言えば、アホバカバラエティ化の潮流を挙げなければならない。もちろん、それは私の年齢とも関係することだろうが、とにかく昨今の映画界とTV界の衰退ぶり（出来の悪さ）は目を覆うばかりだ。

そんな思いが強いだけに、20世紀最大の映画スター、チャールズ・チャップリンの生きざまを、本作のような唯一の“家族公認ドキュメンタリー”で見せられると、その違いに唾然！果たして日本の映画界やTV界の改善、改革、そして復活の道はあるのだろうか？2026年の年始にあたり、そのことを若い人たちにはしっかり考えてもらいたいものだ。

2026（令和8）年1月5日記